OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バウムガルテンの『美学』の基本構造の淵源としてのレトリック
Author(s)	松尾, 大
Citation	弁論術から美学へ : 美学成立における古典弁論術の影響. 2014, p. 81-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54559
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

バウムガルテンの『美学』の基本構造の淵源としてのレトリック[1)]

松　尾　　大

序

この論考は、バウムガルテンの『美学』の基本構造の淵源をつきとめることを目的とする。バウムガルテンはこの書の早い箇所で、認識の完全性を与える六つの質として豊かさ、大きさ、真理性、明らかさ、確かさ、及び生命を挙げる[2)]。そしてその少しあとで、質のこの分類は「論証」（argumentum）の分類でもあることが述べられる[3)]。著作としての『美学』の基本的構成を与えるのは、この分類である。つまり著作の全体は、この六つの質をそれぞれ扱う六つの部分に大きく分節されている。そしてその六つの質に多数のフィギュールを分配することによって、基本的に著作『美学』のテクストは織りなされている。

したがってバウムガルテンの『美学』の基本構造の淵源を突き止めるためには、質、論証のこの分類と、それぞれへのフィギュールの分配という操作の淵源を突き止めればよい。以下の論述は、これに関する二つの先行研究を吟味し、それらが説明として不十分であることを示し（第１章）、ついで、それに代わる新たな説明として、バウムガルテンの『美学』と近い時期のレトリックのテクストを示す（第２章）ことに充てられる。

１　バウムガルテンの六つの質の淵源に関する先行研究

バウムガルテン『美学』の中核を構成する六つの質のソースに関する先行研究としては、古代レトリックを挙げるリンと、バウムガルテンと同時代の美学理論を挙げるシュタインのものとがある。リンは古代レトリックが文体の質として挙げる「豊かさ」を豊かさの、「品位」（dignitas）を大きさの、「真実らしさ」を真理性の、「明瞭性」を明るさの、「明晰性」を説得性の、「エートス」を生命に比較可能なものとして挙げる[4)]。一方、シュタインは、バウムガルテンとほぼ同じ時期にホガースが美的範疇として「適合、多様性、均一性、単純さ、複雑さ、嵩（fitness, variety, uniformity, simplicity, intricacy, quantity）」を挙げている箇所に言及し、「適合と単純さに美的真理が、多様性に豊かさが、

１）本論考は、大阪大学会館における講演「バウムガルテン美学の構成要因としてのレトリック」（2011年12月17日）の原稿に基づいている。

２）Baumgarten, *Aesthetica*, 22.

３）ibid., 26.「論証には、豊かにするもの、高貴にするもの、証明するもの、照明するもの、説得するもの、感動させるもの（locupletantia, nobilitantia, probantia, illustrantia, persuadentia, moventia）がある。」

４）Linn, p.428.

嵩に大きさが対応する」と述べる。他方でバウムガルテンの明るさと生命に対応するものは欠けているとする[5)]。

この二つの先行研究は、バウムガルテンの六つの質の淵源を特定する試みとしては完全に失敗していることを以下に示す。

先ずリンであるが、挙げられる古代レトリックのテクストは、バウムガルテンの六つの質の淵源としては以下の点で失格である。

1 古代レトリックのテクストで問題になるのは、措辞、文体の質であって、論証の質ではない。
2 これらを分類、体系化するという姿勢がない。つまり古代レトリックのテクストは、各々の質をばらばらに挙げている。
3 六つの質のうち、バウムガルテンの美学体系を完成させる要石ともいうべき最後の二つの質（説得性、生命）を説明できない。
4 これらの質のそれぞれにフィギュールを分配するという手続きは、それらのテクストには欠けている。

以下この四点を順次論じたい。第一点については、古代レトリックはそれらの質を文体や内容に帰属させており、論証との関係づけがないことから明らかである。第二点については、リン自身が認めているように、それらの質は「折にふれて」（gelegentlich）数え上げられるのみである[6)]。確かに古代レトリックにも質のシステムがないわけではない。例えばテオプラストスは四つの措辞の長所（純粋、平明、装飾、適合）のシステムの起源として知られている。しかしリンはこれに言及していない。第三点については、確かに豊かさと大きさと明瞭性と真理性には比較可能なものが古代レトリックにあるが、他の二者についてはそれがないことを指摘すべきである。すなわち、リンが確実性に比較可能なものとして挙げる明晰性（aperte）は明瞭性、つまり第四の質であって、第五の質（確実性）ではない。また、第六の質である生命に比較可能なものとしてリンが挙げるエートスは、立証手段としての性格ないし生き方のことで、バウムガルテンにおける第六の質である生命（vita）とは全く別のものである。第四点は、リンの挙げる箇所でこれらの質にフィギュールを分配するという操作は見られないことから証明される。

次にシュタインであるが、彼はこう書いている。

> ホガースはバウムガルテンとほぼ同じ時期に、適合、多様性、均一性、単純さ、複雑さ、嵩（fitness, variety, uniformity, simplicity, intricacy, quantity）という美的範疇を持っている。バウムガルテンでは適合と単純さに美的真理が、多様性に豊かさが、嵩に大きさが対応する。したがってこれらの範疇は、当時一般的に受け入れられていて、自然に理解される美的カノンを示す。それは一部フランス古典主義の伝統であり、一部、統一における多様という公式の現われである。

5）Stein, p.351.
6）Linn, p.428: このグループの個々のものは、古代修辞学に比較されるものを持っている。つまり、内容の、あるいは一層多くは文体の「長所」（virtutes）ないし要件の折にふれての（gelegentlich）列挙においてである。

後者である限りで、それはクルーザやハチスンにもある。……バウムガルテンの概念がこれらの公式に対応する限りで、それらはオリジナルではない。固有なのは光と生命、表現の生動性と、内容の感性的生命である[7)]。

この議論の評価のためには、リンの所説を吟味した時に用いた四つの観点がやはり有効である。この四つのうち、三つの批判がシュタインには当てはまるからである。先ず、美的範疇として挙げられる以上、論証の質ではないことは明らかである。第二点については、確かに六つの質の列挙という仕方で体系化はされているので、この点ではバウムガルテンと一致している。しかし第三点、個々の質の一致はあまり見られない。実際に一致しているのは豊かさと大きさのみである。これに対し、適合と単純さが美的真理に対応するというシュタインの見解は誤りである。なぜなら、ホガースにおいて、適合は部分が全体に適合していることとして、単純さは部分同士の均衡として規定されており、例えば三色旗のそれぞれの色が旗の全体に適合していることと、三つの色が互いに均衡していることという例を考えてみれば、形式に関わるこれらが内容に関わる真理性とは似ても似つかぬものであることは明白である。

また、シュタインが「固有なのは光と生命」と書いているのも誤りである。バウムガルテンの第五の質である確実性が抜け落ちているからである。いずれにせよ、ホガースの挙げる美的範疇が、バウムガルテンの六つの質のすべてを説明しうるものでないことは確かである。最後に第四点について言えば、むろんのことホガースに美的範疇とフィギュールとの関係づけはない。

2　バウムガルテンの六つの質の真の淵源

バウムガルテンの『美学』に近い時期に公刊され、広く普及していたレトリックのテクストを、バウムガルテンの六つの質の理論の淵源として証明することがこの章の目的である。そのために、リンの挙げる古代レトリックも、シュタインの挙げる近代美学理論も充たせなかった淵源の四つの条件のすべてを、これらのテクストが充たすことを示すという手続きをとる。

先ず、以下に取り上げるすべてのレトリック・テクストにおいて、問題となる質が論証の質として提示されていることから、第一の条件は充たされている。

第二に、質の分類、体系化があるという条件も充たされている。バウムガルテンに時期的に近い17、18世紀には、おびただしい数のレトリックのテクスト、マニュアル、教則本、ハンドブックの類が出版されている。それらは論証の質の分類、体系化として、様々のタイプのものを提示している。先ず、ロゴス、エートス、パトスという、アリストテレス以来の伝統的分類を踏襲するタイプがある。この三者をさらに下位の種に細分するタイプもあるが、先ずは細分しないタイプを幾つか示そう。

ルドヴィチは論証の種類として、パトスに相当する「感動させる論証」(argumenta commoventia)、ロゴスに相当する「証明する論証」(argumenta probantia)、エートスに相当する「好意を得る論証」

7）Stein, p.351.

（argumenta conciliantia）を挙げている[8)]。この三つは古代レトリックが弁論家の三つの機能として数え上げるものであるが、すでに古代においてこの三機能とアリストテレスの三つの説得手段（ロゴス、エートス、パトス）との相関が見られ、ここでもそれが踏襲されている。

ヴィーコも同じ列挙をする[9)]。証明する論証の名称が「立証する論証（argumenta docentia）」となっているが、同じものである。ウーゼは、ロゴスに対応するものとして「説得する論証」（argumenta persuadentia）、パトスに対応するものとして「感動させる論証」（argumenta commoventia）、エートスに対応するものとして「好意を得る論証」（argumenta conciliantia）を並べている[10)]。メンリングも同様である[11)]。

以上は、アリストテレス的三分法をそれ以上細分しないタイプだが、これをさらに細分するタイプもある。例えば三つのうちロゴスをさらに下位の種に分けるタイプとしてはアルステッドの分類がある。彼は先ず論証を「立証する論証ないしロゴス的論証」（docentia sive logica）、「喜ばせる論証ないしエートス的論証」（delectantia seu ethica）、「感動させる論証ないしパトス的論証」（moventia seu pathetica）の三つに分け、「ロゴス的論証」をさらに「説明する（explicantia）論証」、「証明する（probantia）論証」、「増幅する（amplificantia）論証」の三つに細分する[12)]。

アルステッドのこの体系をさらに拡大しているのはハルバウアーである。すなわち、上位の三つの類に第四の類を付加し、また第一の類の下位の三つの種に第四の種を付加している[13)]。上位の三つの類としてアルステッドらが挙げる「ロゴス的論証ないし立証する論証」「パトス的論証ないし感動させる論証」「エートス的論証ないし好意を得る論証」に加えられるのは、第四の類としての「レトリック的（rhetorica）論証ないし説得的（persuadentia）論証」である。さらにハルバウアーは第一の類「ロゴス的論証ないし立証する論証」の三つの下位種に「照明する（illustrantia）論証」を付加する。以上を整理すれば以下のようになる。

1. logica または docentia
   1-1. explicantia
   1-2. probantia
   1-3. illustrantia
   1-4. amplificantia
2. rhetorica または persuadentia

8）Ludovici, Cap.ii, §1: 修辞学者たちはパトスと呼ぶ。ラテン名では「感動させる論証」であり、ロゴスつまり証明する論証、エートスつまり好意を得る論証と区別される。後者は好意を獲得し、前者は提題を証明する。われわれのものは感動させる（Πάθη vocant Rhetores; Latino nomine argumenta commoventia, cantradistincta λόγοις seu probantibus, et ἤθεσι seu conciliantibus. Haec gratiam captant: illa Thesin probant: nostra affectus movent）。

9）Vico, p.25.

10）Uhse, p.283.

11）Grimm, p.68.

12）Alsted, 1630, p.471.

13）Hallbauer, p.260.

3. pathetica または commoventia
4. ethica または conciliantia

アリストテレス的三分法を素材としつつ二分法の組み合わせに再編成しているのはファブリキウスである。彼は二つの分類を提示している。そのうちの第一の分類は、先ず全体を「事物に関する」(realia) ものと「人物に関する」(personalia) ものに分け、前者をさらに「立証するもの」(docentia) と「説得するもの」(persuadentia)、後者を「好意を得るもの」(conciliantia) と「感動させるもの」(commoventia) に区分する[14)]。第二の分類は、全体を「理論的」(theoretica) と「実践的 (practica) またはパトス的 (pathetica)」に二分し、前者をさらに「論証するもの (probantia)」と「照明するもの (illustrantia)」に二分するものである。

アリストテレス的三分法をベースにしない分類法もある。「説明する論証 (argumenta explicantia)」と「増幅する論証 (argumenta amplificantia)」を並べるのはケッカーマンである[15)]。ミールスはこれとは異なる分類を挙げている。彼はある箇所で「説明する (explicantia) 論証」、「証明する (probantia) 論証」、「増幅する (amplificantia) 論証」を挙げ[16)]、別の箇所では「立証する (docentia) 論証」、「証明する (probantia) 論証」、「増幅する (amplificantia) 論証」、「感動させる (moventia) 論証」を挙げている[17)]。

以上の論述によって、バウムガルテンに近い時代のレトリックが、質を分類、体系化するという第二の条件を充たしていることは十分実証された。次には第三の条件、つまりバウムガルテンの六つの質がこれらのテクストにおいて与えられていることを示そう。念のためバウムガルテンの六つの質をもういちど掲げておこう。

> 論証には、豊かにするもの、高貴にするもの、証明するもの、照明するもの、説得するもの、感動させるもの (locupletantia, nobilitantia, probantia, illustrantia, persuadentia, moventia) がある[18)]。

17、18世紀のレトリックのテクストが挙げる論証の質が、バウムガルテンの論証の質とどのくらい一致しているかを、各テクストについて以下に検証する。取り上げる順序は、第二の条件の検証の際に取り上げられた順序とする。

先ずルドヴィチであるが、「感動させる論証」(argumenta commoventia) は用語の類似性から moventia、すなわち第六の質と一致することがわかる。また、それの説明中に movent の語もあるが、これはバウムガルテンが第六の質を呼ぶ語である。「証明する論証」は、probantia という用語が一致するので、第三の質に対応することがわかる。三つめの「好意を得る論証」(argumenta conciliantia) に

14) Fabricius, p.49.
15) Keckermann, p.1129.
16) Mirus, p.98.
17) ibid., p.140.
18) Baumgarten, *Aesthetica*, 22.

ついては、多少の解釈作業が必要である。「好意を得る」（conciliare）は、古代レトリックがエートスに対応する弁論家の機能に割り当てた用語であるが、同じ機能を呼ぶ語には他に「喜ばせる（delectare）」がある[19]。さてこの語はバウムガルテンの『美学』においては、movere と並べて第六の質である生命（vita）の同義的説明にされている[20]。また、第六の質をバウムガルテンは快と結びつけるが[21]、快はホラーティウスにおいて delectare と結びつけられているから[22]、第六の質は delectare に対応することになる。したがって、エートスに対応する delectare、パトスに対応する movere の両者がバウムガルテンの第六の質に一致する。確かに、パトスが感情効果であることは理解しやすいが、エートスが感情と結びつけられるのは、この語のアリストテレス的意味（「性格」）だけを考えると理解しにくい。しかしすでに古代において、エートスがパトスと同じように感情を表わす語として用いられていたことを考えれば得心できよう[23]。以上要するに、ルドヴィチの挙げる三つの論証は、バウムガルテンの六つの質のうち第三の真理性、第六の生命と一致すると言える。

ヴィーコについても同じ結論が導き出せる。「立証する」（docentia）は「証明する」（probantia）と並んで、ロゴス的機能を言い表す標準的用語であるから、第三の質に対応する。残りの「好意を得る」（conciliantia）と「感動させる」（commoventia）については、ルドヴィチの論述箇所で挙げたのと同じ理由によって第六の質に対応する。ウーゼについては、ロゴス的機能を持つ「説得する論証」が真理性に、パトス的機能を持つ「感動させる論証」とエートス的機能を持つ「好意を得る論証」とが生命に一致することは明らかである。

アルステッドの場合は、分類が細かいだけに、いっそう多くの質との対応が見いだされると期待される。先ず、「立証する論証ないしロゴス的論証」の下位の種である「説明する（explicantia）論証」については、バウムガルテンにおいて explicantia の語が明瞭度、つまり第四の質を上げることを意味することから、第四の質に対応するといえる[24]。第二の下位の種である「証明する論証」については、既述のように第三の質である真理性に対応する。第三の下位の種である「増幅する論証」については、第一と第二の質に一致する。このうち第一の質との対応を証言する箇所には、例えば『美学』781 がある。そこでは第一の質を呼ぶ語である「豊かさ（copia）」の形容詞形「豊かな（copiosus）」の同義語として amplus が使われている。言うまでもなく増幅（amplificatio）とは amplus にするこ

19）Lausberg, § 1079.

20）Baumgarten, *Aesthetica*, 565.

21）Baumgarten, *Aesthetica*, 558: 感動的であるだけでなく、同意を強制し、是認を絞り取り、或る種の快と必然的欲求を引き出す認識（non movens solum, sed et cogens ad assensum, extorquens approbationem, et aliquam voluptatem appetionemque necessarium cognitio）。

22）Horatius, 333-334: 詩人らは、有用であること（prodesse）、または喜ばせること（delectare）、または快くもあり、同時にまた生活に適切であることを歌おうとする（Aut prodesse volunt, aut delectare poetae,/aut simul et iucunda et idonea dicere vitae）。; 343-344: 読者を喜ばせ、公正な助言を与えることによって、快に有用を混ぜ合わせた者は、全ての人の承認を得るだろう（omne tulit punctum qui miscuit utile dulci/lectorem delectando pariterque monendo）。

23）Quintilianus, 6, 2, 8-9; Kroll, p.69.

24）Baumgarten, *Aesthetica*, 649: quam explicare vel etiam illustrare.

とである[25]。また、アルステッドは「増幅する論証」が copia に寄与するとしている[26]。「増幅する論証」と第一の質である「豊かさ」との対応、一致はこうして証明される。第二の質である「大きさ」については、バウムガルテン『美学』239 で「増幅」（amplificatio）の形容詞形 amplus が「大きい」を表す sublatus の類義語として使われていることから、増幅との一致は証明できる[27]。クルツィウスは、amplificatio がものを大きくすることと、表現を延長することの二つの意味を持つと書いているが[28]、この二つの意味は、バウムガルテン直前のレトリックでは混交して使用されていたのに対して、バウムガルテンはそれを「豊かさ」と「大きさ」として区別したと思われる。

アルステッドの第二の類である「喜ばせる論証ないしエートス的論証」と第三の類である「感動させる論証ないしパトス的論証」については、すでに述べたように第六の質に一致する。パトス的論証に関するアルステッドの説明中には、第六の質である生命との対応についてのさらなる論拠が見いだされる。先ず「パトス的」（pathetica）という用語であるが、これはバウムガルテン『美学』334 で、第六の質である生命（vita）の同義語として使われている。また、「感動させる論証」についてのアルステッドの説明中には、第六の質とのさらなる一致がある。そこには「感動させる論証は、聴き手の感情（affectus）をかきたて、何かを希求（appeto）させたり、忌避（aversor）させたりするためのものである。そこからまたアフェクト的（affectuola）とも呼ばれる」という文言がある[29]。これと第六の質についてのバウムガルテンの以下の説明とを比較してみれば、表現上の類似は一目瞭然である。

> 或る表象を産出しようと努めるならば、つまり私の精神の力ないし私を一定の表象を生み出すことに集中させるならば、私は欲求する（appeto）。その反対のものを欲求するところのものを私は忌避する（aversor）。従って私は欲求と忌避の能力（§216）、すなわち欲求能力（広義の意志、§690参照）を持つ。努力ないし希求ないし私の力の私の規定は、欲求する場合は欲求（欲望）、忌避する場合は忌避である[30]。

また、少しあとには、第六の質を持つ表象について「動因的（触発的、動かす、熱烈な、実行的、実践的、広義で生き生きしたもの）」（movens, afficiens, tangens, ardens, pragmatica, practica et viva latius）と言われている[31]。afficiens の語がアルステッドの affectuola と響き合うことが注目される。以上をまとめれば、アルステッドの体系に含まれる論証の質は、バウムガルテンの六つの論証の質のうち五つと一致していると言うことができる。

次のハルバウアーでは六つすべてが現われる。先ず「ロゴス的または立証する論証」の下位種の

25）他にも 271 で同様の類義的同格が見られる。

26）Alsted, 1649, p.370: Argumenta amplificantia, qua dicuntur in Logicis et Oratoriis, faciunt ad copiam rerum. copia はバウムガルテンが第一の質を呼ぶ用語である。

27）他に amplus 系の語が大きさを意味する用例は 291, 334, 442 にある。

28）Curtius, p.483.

29）Alsted, 1630, p.473.

30）Baumgarten, *Metaphysica*, 663.

31）ibid., 669.

「説明する論証」は前述のようにバウムガルテンの第四の質である「明るさ」に対応する。第二の下位種である「立証する論証」が第三の真理性に一致することはすでに述べたとおりである。第三の下位種である「照明する（illustrantia）論証」は、バウムガルテンが第四の質を呼ぶ用語である。第四の下位種である「増幅する論証」は、前述のように第一と第二の質に対応する。第二の類である「説得的（persuadentia）論証」は、用語の一致から第五の質である説得性に対応する。第三の類である「パトス的または感動させる論証」と第四の類である「エートス的または好意を得る論証」とは、すでに述べたように第六の質に一致する。したがってハルバウアーにはバウムガルテンの六つの質すべてが見いだされる。

ファブリキウスについては、第一の分類における「立証する論証」が第三、「説明する論証」が第四、「好意を得る論証」と「感動させる論証」が第六に対応する。また第二の分類においては、「証明する論証」が第三、「照明する論証」が第四に一致する。「実践的またはパトス的論証」は第六の質に一致するが、「実践的（practica）」という語の使用は、そのことをさらに補強する。なぜなら、この語はバウムガルテンの『形而上学』669 や『美学』762 においては第六の質を表わしているからである[32)]。

ケッカーマンでは「説明する論証」と「増幅する論証」があるから、バウムガルテンの第一、第二、第四の質と一致する[33)]。ミールスについては、「説明する論証」が第四、「証明する論証」が第三、「増幅する論証」が第一、第二、「感動させる論証」が第六の質と一致する。

ここまでの考察の結果、バウムガルテンと同時代のレトリック体系は、バウムガルテンの六つの質すべてを供給できることが実証された。特にハルバウアーの分類は、それだけで六つすべてを与えている。この書の公刊は1725年であり、バウムガルテンは10歳ころであるから、読んだ可能性は十分考えられる。他にもアルステッドとミールスは五つを、ファブリキウスは四つを供給できる。特にファブリキウスの方は1724年公刊なので、ハルバウアー同様、バウムガルテンの少年期に当たるから、目にする機会は与えられていた可能性が大きい。

バウムガルテンの六つの質というシステムの淵源が充たすべき第四の条件に移ろう。それは六つの質のそれぞれにフィギュールを分配するという考え方であった。この逆の操作、つまりそれぞれのフィギュールが持つ質の記述は古来存在し、近代レトリックもそれを踏襲している。例えばアルステッドは、換喩には感情効果、壮大さ、明るさ、大きさなどを、隠喩には豊かさ、荘重さ、明るさ、崇高、祝祭性を、提喩には荘重さ、甘美さ、感情効果を帰属させている[34)]。

これに対し、各々の質ごとに、それに寄与するフィギュールをとりまとめるという発想は近代になって現われる。例えばアルステッドは、豊かさという質に寄与するフィギュールとして類義累積（synonymia）と付加形容語（epitheton）とを挙げている[35)]。ノイマイルは三つの機能にフィギュー

32）Baumgareten, *Aesthetica*, 762: 実践的、実際的なもの、行為へと駆り立てる系（practica s. pragmatica, foecunda deducendis inde porismatibus ad agendum impellentibus）。
33）Keckermann, p.1129.
34）Alsted, 1630, pp.482f.
35）Alsted, 1630, p.483.

ルを次のように割り振っている[36)]。

立証するもの
　暗示設問法（communicatio）
　分解列挙（distributio）
　予防論法（prolepsis）
　設問自答（subjectio）
　予想答弁（responsio）
　譲歩論法（concessio）
　承服論法（permissio）
喜ばせるもの
　現前化（hypotyposis）
　人柄描写（ethopoiia）
　暗示黙過（praeteritio）
　対　比（antithesis）
　訂　正（correctio）
　ためらい（dubitatio）
　反　語（ironia）
感動させるもの
　設問法（interrogatio）
　未　決（sustentatio）
　人物現出（prosopopoiia）
　転　訴（apostrophe）
　祈　願（obsecratio）
　願　望（optatio）
　感　嘆（exclamatio）

この二人の体系においては、質による分類は論証の分類でもあるから、間接的に各々の論証にフィギュールを分配していることになる。

いっそう直接的に、それぞれの質を持つ論証に寄与するフィギュールを枚挙しているのはゴルトハーゲンである[37)]。「証明する論証」には定義と語源を、「照明する論証」には物語（historia）、範例法（exempla）、証言（testimonia）、比較（comparata）、喩え（similia）、対比推論法（contraria）、教訓話（apologus）、寓言（parabola）、徴表（emblemata）、箴言（meditationes）、格言（sententiae）を分配している。

36）Neumayr, pp.37-42; p.45 ; p.51.
37）Goldhagen, p.9, p.25.

他方、バウムガルテンは、「豊かにする論証」として剰語（pleonasmus）、類義累積（synonymia）、多面みがき（exergasia）、省略（ellipsis）、代換（hypallage）、迂回表現（periphrasis）、暗示黙過（praeteritio）、多種列挙（synathroismus）を、「増幅する論証」として過大誇張（auxesis）、反復法（repetitio）、連鎖漸層（climax）、漸層（gradatio）、隠喩（metaphora）、例証（similia）、似像（comparatio）、誇張（hyperbole）、パレーシア（parrhesia）、感嘆（exclamatio）を、「証明する論証」として派生形反復（paregmenon）、理由付加（aetiologia）、格言（sentential）、定義（definitio）、訂正（epanorthosis）を、「照明する論証」として現前化（hypotyposis）、活写（diatyposis）、人物描写（characterismus）、比較（comparata）、類似（assimilatio）、寓言（parabola）を、「説得する論証」として類義累積 （synonymia）、多面みがき（exergasia）、設問法（interrogatio）、反復法（repetitio）、連鎖漸層（climax）、漸層（gradatio）、ためらい（dubitatio）を挙げている。

これを他のテクストと比較すると、論証の質にフィギュールを分配するという思考形式自体は共通だが、実際の分配の仕方については、あまり類似性は見られないことがわかる。例えばゴルトハーゲンが「証明する論証」として定義を、「照明する論証」として比較、寓言を挙げているのは、バウムガルテンとの共通点だが、他は異なっている。他のテクストについても同様である。この点からすると、バウムガルテンの独自性はかなり大きい。個々のフィギュールの効果を自分で検証して、六つの質に分配したと考えられる。

以上の議論によって、バウムガルテンの『美学』との類似性の点で、バウムガルテンに近い時期のレトリックのテクストは、古代レトリックや18世紀美学理論よりはるかに大きな程度を示していることが実証された。

結　　論

バウムガルテンの『美学』の基本的構造としての、論証の六つの質の区別と、その各々へのフィギュールの分配という思考形式とは、バウムガルテンに近い時期のレトリックのテクストに類似、対応するものを見出せることが実証された。この点で『美学』は、それらレトリックのテクストに極めて多くを負っていると言える。そしてそれを考えれば、病のため中断された『美学』が完成された姿を、ある程度推定する作業も可能になろう。なぜなら、バウムガルテンに近い時期のレトリックのテクストには、感動させる論証についての論述の分厚い蓄積があるから、それらを手掛かりにすれば、バウムガルテンが執筆できなかった『美学』の第六部分（第六の質である「生命」に関する論述）がどのようなものになっていたか、ある程度推定することができるからである。

他方また、近い文脈に属するレトリックのテクストとの比較は、バウムガルテンの独自性をも明らかにした。確かにそれらレトリックのテクストは、六つの質すべてを供給しうる素材源としての資格を有しているが、この六つを一定の順序で並列するというシステムは、それらのテクストには見られない。また、個々のフィギュールを六つの質に分配する仕方にも、バウムガルテンのオリジナリティーが認められる。

文献リスト

Alsted, Johann Heinrich, *Encyclopaedia septem tomis distincta*. Herbornae Nass. 1630.

Alsted, Johann Heinrich. *Scientiarum omnium encyclopaedia*. Tomus quartus. Lugduni, 1649.

Baumgarten, A. G., *Aesthetica*. Frankfurt a.d.Oder, 1750; 1758.

Baumgarten, A. G., *Metaphysica*. Editio II. Halae Magdeburgicae, 1743.

Curtius, E. R., *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*. Bern: Francke Verlag, 1948.

Fabricius, J. A., *Philosophische oratorie, Das ist: vernuenftige Anleitung zur gelehrten und galanten Beredsamkeit* 1724 (ND Kronberg, 1974).

Goldhagen, Hermann, *Institutiones oratoriae et poeticae*. 1779.

Grimm, Gunter E., "Von der ‚politischen' Oratorie zur ‚philosophischen' Redekunst. Wandlungen der deutschen Rhetorik in der Frühaufklärung," *Rhetorik* 3 (1983), 65-96.

Hallbauer, F. A., *Anweisung zur Verbesserten Teutschen Oratorie*. 1725 (Scriptor Verlag, 1974).

Horatius, Quintus Flaccus, *De arte poetica liber*.

Keckermann, Bartholomäus, *Systema Systematum: Omnia Huius Autoris Scripta Philosophica uno volumine comprehensa*. Hanoviae, 1613.

Kroll, W., „Ἐν ἤθει," *Philologus* 75 (1919), 68-76.

Lausberg, H., *Handbuch der literarischen Rhetorik: Eine Grundlegung der Literaturwissenschaft*. Zweite, durch einen Nachtrag vermehrte Auflage. 2 Bde. Max Hueber Verlag: München, 1960.

Linn, M.-L., "A. G. Baumgartens 'Aesthetica' und die antike Rhetorik," *Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* 41 (1967), 424-434.

Ludovici, Gottfried/Boehme, Johann Andreas, *De eloquentia commovente*. 1695.

Mirus, Adam Erdmann, *Universa philologia*. Lipsia, 1694.

Neumayr, Franz, *Idea Rhetorica, sive Methodica Institutio*. 1753.

Quintilianus, *Institutionis Oratoriae Liber Decimus*.

Stein, K. H. von, *Die Entstehung der neueren Ästhetik*. Stuttgart, 1886.

Uhse, F., *Wohl-informierter Redner*. 1709.

Vico, Giambattista, *The art of rhetoric: (Institutiones oratoriae, 1711-1741).* From the Definitive Latin Text and Notes, Italian Commentary and Introduction by Giuliano Crifò. Ed. and trans. Giorgio A. Pinton and Arthur W. Shippee. (Value Inquiry Book Series 37) Amsterdam: Rodopi, 1996.